

## [国 語]

## 批判的思考を取り入れたパネルディスカッション指導の工夫

渡邊 三津\*

## 1 主題設定の理由

中学校学習指導要領には「国語を適切に表現し正確に理解する力を育成し、伝え合う力を高める」<sup>1)</sup>ことが目標として掲げられている。生徒達が「激しく変化するこれからの社会をよりよく生きていくためには、互いの立場や考え方を尊重して言葉による伝え合いを効果的にし、相互の理解を深め」<sup>2)</sup>る必要がある。

学習指導要領の「話すこと・聞くこと」の指導事項〔第2学年及び第3学年〕「話し合い」では「相手の立場や考え方を尊重し、話し合いが目的に沿って効果的に展開するように話したり聞き分けたりして、自分の考えを深めること。」<sup>3)</sup>とある。生徒総会や学級の諸活動における生徒の話し合い活動をみると、自分の意見を発表することはできても、他者と意見を交わすことによって考えをまとめたり深めたりすることができる生徒は、ほとんどいない。一つ質問して回答が返ると、第三者からみて不十分な回答でも「わかりました」と言って終わりにする生徒が大半である。現状では、話し合いによって「自分の考えを深め」ているとは言えない。

話し合い活動の形態のひとつであるパネルディスカッションは、話し合いの中で意見が変容していくことが可能な活動であり、「自分の考えを深める」ことに対して有効な学習活動である。しかし高橋俊三は「話し合いの途中で新しい方向へ創造していくことができる」<sup>4)</sup>パネルディスカッションは「論理が甘くなり、相手への攻撃が弱くなるという欠陥」をもつとし、「欠陥」を埋める方策として、「第一回の発言で立論し、第二回発言で問題を整理し、そこで全体的話し合いにする」<sup>5)</sup>ことを提案している。「問題の所在」をパネルディスカッションの参加者が認識することによって話し合いがしやすくなり、「結論の出ない段階なので、話し合って結論を出すことの必然性を感じることもでき」<sup>6)</sup>ると述べている。

「問題の整理」のためには学習指導要領の「話の中心部分と付加的な部分、事実と意見との関係に注意し、話の論理的な構成や展開を考えて、話したり聞き取ったりすること」の中の、聞き取る力がまず必要であろう。と同時に、先に述べた生徒の現状から、論理を聞き取る力をつけるとともに、聞き取ることが「話し合って結論を出す」ことへの欲求に繋がる必要があるのではないかと考えた。「自分の考えを深める」話し合い活動に繋がる聞き取りを行う方策として、批判的(クリティカル)思考に着目した。井上尚美・中村敦雄によると、「『クリティカル』とは、つねに『それは本当かな?』『なぜ、そうなのかな?』といった『心構え』のもとで考えを働かせ、必要に応じて他の情報と比較するなどして確かめようとする『身構え』でいること」<sup>7)</sup>である。クリティカルに聞くことは、話し手の考えを深く理解しようとする活動である。意見を交換し学び合うためには、話し手の意見すべてに納得しては行えない。従って、話し手から発信される情報を自分のクリティカルな視点でとらえることが、相手の情報から話し合いの糸口を見つけることに繋がり、それによって、「自分の考えを深める」話し合い活動が実現できるのではないかと考えた。

以上の理由から、「自分の考えを深め」「伝え合う力」を育む話し合い活動の実現のために、聞く力に着目し、クリティカルに聞く力、話の論理を正確に聞き取る力をつけた上で、パネルディスカッションを行うことにした。

## 2 研究の目的

批判的(クリティカル)思考を取り入れ、聞く力を育成することが、「自分の考えを深め」「伝え合う力」を育む話し合い活動の実現に繋がるか、明らかにする。

---

\* 長岡市立東北中学校

### 3 研究の構想

#### (1) 内容

生徒に批判的思考の定義や必要性について理解させ、クリティカルに聞く力を育成してからパネルディスカッションに取り組むためには、独自の単元を設定し教材を組み合わせる必要がある。また、話し合い活動は生徒の自主的な取組がなければ成立せず、生徒の今までの生活歴もその発言にその大きく影響する。従って、論題は生徒が進んで発言したくなるもの、生活に密着したものを設定する必要がある。そこで、本単元の根底に「メディア・リテラシー」を置くことにした。メディア・リテラシーとは菅谷明子によると「メディアが形作る『現実』を批判的（クリティカル）に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力<sup>8)</sup>」のことである。メディアは我々の生活に密着しており、日々進化している。生徒達は「激しく変化するこれからの社会をよりよく生きていく」ために、メディアの性質やメディアとのつきあい方について学ぶ必要がある。また、「メディアが形作る『現実』をクリティカルに読み取る」ことについて考え、話し手の発言をクリティカルに聞くことを試みることで、批判的思考の定義・必要性について十分理解した上でパネルディスカッションを行うことが可能になると考えた。

#### (2) 方法

導入では「情報社会におけるメディアとのつき合い方」を取り上げた説明文を学習する。ここで学習することは二つある。一つ目は論理の展開を押さえ、論理的话题の提示の仕方について考えることである。二つ目はメディア・リテラシーとは何か、「メディアが形作る『現実』を批判的（クリティカル）に読み取る」とはどういうことなのか、具体的な例をもとに知ることである。この学習にあたって、メディアに関する論題についてパネルディスカッションを行う。

パネルディスカッションの準備の最終段階で、聞く力を伸ばすスキル学習を行う。この学習のねらいは「話をクリティカルな視点をもって聞く力」と「話の論理を正確に聞き取る力」の育成である。次に、「聞く立場の視点」で自分の論を見直し、立論に向けての準備が十分なのか検討する。

また、話し合いの質を高めるためには自分の「話すこと・聞くこと」の活動について正確な自己評価ができるようにすることも必要である。スキル学習の中で、判断の規準を明確にし自己評価を行う場面を多く設定し、自己評価力の向上を目指す。

最後にまとめとして、パネルディスカッションによって「自分の考え」の深まりを確認し、話し合いを行ったことの価値があったか、活動への取組はどうだったかを評価するために、論説文を書く。この活動によって、生徒達は話し合いによる自己の考えの深化や変容を感じることができよう。

### 4 本単元について

#### (1) 単元名 「パネルディスカッションで考えを深め合おう」

論題「自分の気持ちを伝えることができるメディアはこれ！～「手紙」「電話」「電子メール」～

#### (2) 教材

##### ①導入時に使用する教材

見城武秀 「メディアとわたしたち」 (『中学国語 三年』三省堂)

##### ②パネルディスカッションの準備で使用する教材

汐見稔幸 「人はなぜ書くのか」 (『伝え合う言葉 三』教育出版) 他 20冊

新聞・雑誌・インターネットのHP

#### (3) 単元の目標

- 説明文を論理展開に焦点をあてて学習することやスキル学習によって、クリティカルに聞く力、話の論理を正確に聞き取る力をつけ、話し手としても聞き手を意識して発言できるようにする。
- パネルディスカッションにおいて、クリティカルに聞き、他者と意見を積極的に交換することで、自分の考えを深める。

#### (4) 評価規準

関心・意欲 ・態度	・パネルディスカッションの準備において積極的に資料を求め、活用しようとする。 ・自分の考えを深めるために、意欲的に話し合いに参加する。
話すこと ・聞くこと	・話し手の発言を論理的な構成や展開を考えて正確にとらえ、クリティカルに聞く。 ・伝えたいことを明確にもち、論理的に話す。

読むこと	・教材文を読み、論理の展開の仕方を的確にとらえ、自分の表現に役立てる。
書くこと	・パネルディスカッションの立論を、論理的な発表に繋がるように書く。 ・パネルディスカッション後の論説文で、考えの深まりについて論理の展開を工夫して書く。
言語事項	・相手や目的に応じて文章の形態や展開を選び、発表したり、文章を書いたりする。

## (5) 指導計画 (全11時間)

	「ねらい」と「主な学習活動」	留意点
第一次 3時間	ワークシートを活用した、教材文の「構造の確認」と「大意の把握」 ○「前文・本文・後文」の意味段落に分け、内容を理解する。 ○論理の展開にそって「筆者の考え」と「例示」「説明」の部分の読み取りを行い、ワークシートにまとめる。 ○「メディア・リテラシー」「クリティカル」について理解し、この観点にたつて、教材文を読み返す。 ○電話(携帯電話を含む)・手紙・電子メール(携帯電話のメールを含む)の3つのメディアについて、教材文でいうところの「得意とする表現法」「不得意とする表現法」を考え、ワークシートに記入する。	○生徒の取組の速さ、正確さを見取り、支援する。 ○教材文における「新聞」「テレビ」の「得意とする表現法」「不得意とする表現法」をふり返り、確認させた上でワークシートに取り組みさせる。
第二次 3時間	パネルディスカッションの準備 ○「パネルディスカッション」の活動目的と活動の流れを理解する。 テーマ <b>「自分の気持ちを一番伝えられるメディアはどれ？」</b> ○離れた場所にいる相手に「相手のことが好きで、大切に思っている」という気持ちを伝える目的で使うとすれば、どのメディアを選ぶかを考えてランクをつけ、簡単な理由を書く。 ○そのメディアを選んだ理由の論拠となる「事実」を探す方策を考える。 ○メディアごとにチームに分かれ、少人数グループで論拠となる「事実」を探す。 ○チームごとに情報の交換を行い、優れたものや同じ意見を集約する。 ○チームで立論の中心となる理由を3つ選び、論拠を強化する。 〈発表メモ〉づくり ○全員がパネリストになったつもりで「発表メモ(立論)」を作成する。 ○おすすめのメディアのすばらしさを表す一言(キャッチコピー)を考える。 ○質問事項や質問への対応を準備する。	○参考文献は教師側で提示したもの(20冊)と、各自が準備したものを使用する。 ○各自が「理由」としてあげたものを裏付ける「客観的な事実」としての「情報」を探すように指示する。また、出典等を明らかにすることで客観性が生まれることを伝える。 ○パネリストとコーディネーターは、生徒の希望と事前の取組状況を参考にしながら、生徒と教師が相談して決める。
第三次 2時間	「聞く」力を養うスキル学習 ○「話し手」となるための情報が得られるように、聞くためのポイントを確認する。 〈聞くポイント〉 ・論理を順序立てて、正確に聞き取る。 ・クリティカルに聞き、話し手の「根拠」は本当に確かなものなのか検討する。 ○次時のための発表練習や打ち合わせ(コーディネーターと教師)を行う。	○スキル学習で行った、ディベートの立論の聞き取りをもとに、発表メモを見直したり、発表の仕方を練習したりするよう指示する。
1第四次 時間	「パネルディスカッション」の実施 ○実施後、活動の評価を行い、感想を書く。(図2)	○次時の活動のためにビデオを撮影をする。
第五次 2時間	まとめ ○ビデオで活動を客観的に振り返り、「良かった点」「改善点」を「振り返りシート」に記入する。 ○教師の講評を聞き、良い点を確認し、話し合い活動における課題を意識する。 ○論説文を書く テーマ <b>「自分のメディアに対する考えについて論説文を書こう」</b> ・「前文」「本文」「後文」の構成を意識して書く。 ・パネルディスカッション後の自分の考えを、「理由」「例示」を明確にすることで、読み手に伝わるように書く。 ・今後の自分の課題や全体に対する問題提示などを後文に書く。	○自己評価し、評価の理由を書くことによって、話し合い活動の課題を明確化させる。 ○四百字程度で書かせる。 ○机間指導を行い、意見をどのような構成で書いたら伝わりやすいか助言する。

## 5 学習活動の実際

### (1) 「聞くこと」のスキル学習

スキル学習における各ステップの目標 ～ショートステップを積み重ねよう～

STEP 1 効果的なメモの取り方について確認する。

STEP 2 1の学びを活かし、メモを取る練習をする。

STEP 3 話の論点にそったメモの取り方を練習する。

STEP 4 話を正確に聞き取り、クリティカルな視点で考察する。(図1)

STEP 5 自己評価を行い、活動を振り返る。

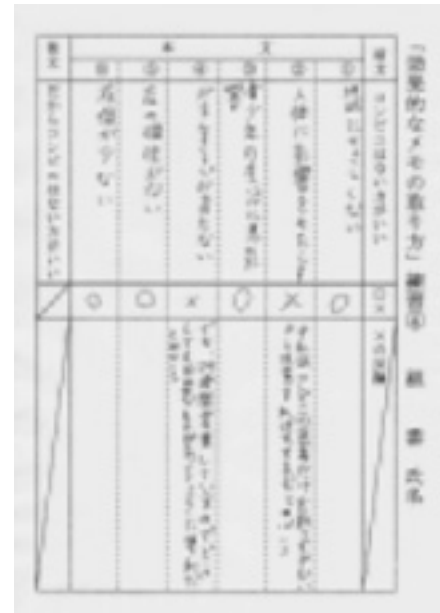


図1 STEP 4

既習の「話すこと・聞くこと」分野の学習を振り返ると問題点があった。それは、この分野における生徒相互で行った評価の中で、教師が意図した評価の観点とはかけ離れた観点から評価している生徒がいたことである。生徒が書いた聞き取りのメモを見ると、話し手の発表が筋道だったものでなくても、トピックスがあれば「A」としている生徒がいることがわかった。そのような生徒は筋道を意識してメモをとっておらず、たまたま印象に残ったことを断片的に書き留めていた。つまり、トピックスのみを後から見直して、内容について評価するときの判断材料にしていたために、正しい評価ができないのではないかと考えられた。この問題を解決し、発言に結びつく聞く力をつけるために、スキル学習を行った。スキル学習は6枚のB6のプリントを使用し、それぞれ目標を明確に掲げて取り組ませた。(STEP 1～5)

STEP 4 (図1)のプリントでは、聞き取りを行いながら、その発言内容に対して賛成か反対かを決め、反対ならその理由を書く練習を行った。その際、発言の全てを安易に納得せず、より深く理解し合うためクリティカルな視点をもつように指示した。このプリントのあと、ディバートの音声教材を使用して、同様に内容を聞き取り、クリティカルな視点をもつためのスキル学習を積み重ねた。

表1

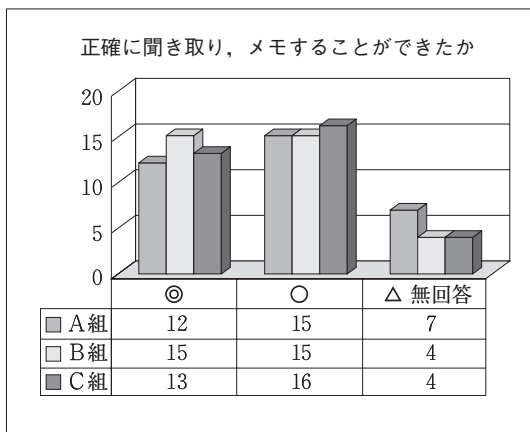
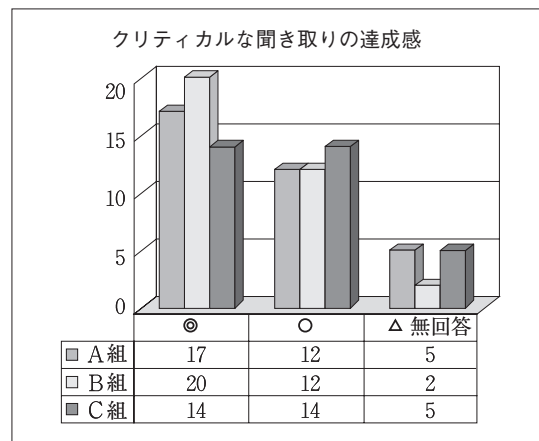


表2



上のグラフは3年生3クラスで学習を行った後にアンケートを採った結果をまとめたものである。表1から、今回の学習で「正確に聞き取り、メモをとること」が達成できたと自分を評価した生徒が多いことが分かる。生徒が取り組んだプリントを見ると、教師のねらいを達成できている生徒が多く、また生徒の自己評価を教師の評価と照らし合わせても一致しているものがほとんどであった。従って、この学習が生徒の聞く力を伸ばし、正しい自己評価をするのに有効であったと思われる。また、「クリティカルな聞き取りの達成感」(表2)も達成できたと判断した生徒が多かった。従って、このスキル学習が、次時のパネルディスカッションの準備として有効な学習であったと言える。小型のプリントを使用してテンポよく学習活動を展開させたこと、生徒が「クリティカル」という言葉にゲーム性を感じたこと、生徒にとって学習の達成度が明確だったことが、今回の意欲的な取組と成果を生んだ。

(2) パネルディスカッションの質を高める観点からみた「クリティカルに聞く力」の有効性

※ パ=パネラー フ=フロア ( )内は各メディアの頭文字

パ(メ)「電話は一度にたくさん自分のいいことをいっぺんに伝えられるといましたが、うちの母親もそうなんですけど、ついつい余談で盛り上がってしまって肝心のことは伝わらないおそれがあるのではないのでしょうか。」

パ(電)「伝えたいことを伝えるのは大切なことだと思うんですけど…A君のお母さんは(余談を)楽しそうに話していると思うんですよ。一緒にいて楽しい友達と、無駄な話をすることによって、ストレス解消とか、頑張ろうって気になって無駄ではないと思うんですよ。おしゃべりも、気持ちを伝えるということにおいて、いいことではないかと思っています。」

パ(手)「恥ずかしくて言えないことを文字で表すことはできますが、電話はかけられなかったりしませんか。」

パ(電)「文字で伝えることは自分にとっては楽だと思うんですけど、大変だけど、自分の声で伝えるということは声を通してわかっているわけだから、相手は自分がどう思っているかを、さっきBさんも言うてくれましたが、声の調子で分かるし、自分の気持ちを伝えたことによって相手がそれに対してどう思ったかがわかると思うので、手紙よりもいいのではないかと思います。」

フ「メールのAさんに聞きたいのですが、(メールだと)勇気がもらえるってどういうことですか。」

パ(メ)「声の圧迫感であると思うんですよ。面と向かって話すより、(電話だと)緊張感が違います。そして、例えば知らない人に街角で声をかけるのは勇気があるけど、HPの掲示板に『こんにちは』と書くのは簡単なことなんです。メールは気軽になんでも話せるのです。」

フ「Aさんに聞きます。これは『気持ちを一番伝えるメディアについて』であって、『気軽に』というのは違うと思います。」

パ(メ)「さっきのは例示であって…、気軽に話せるというのは本当ですが、気軽に『送れる』というのは『送れない』というのよりいいのではないのでしょうか。」

上はパネルディスカッションの記録の一部である。このように、話し手の意見をクリティカルに聞き、より相手の考えを理解しようと働きかける活動が展開された。また、論題に対しての話し合いになっているのかを問う場面もみられた。お互いにお互いにつながらないように、早く終わらせようとする話し合いが多かった今までは明らかに違う話し合いとなった。

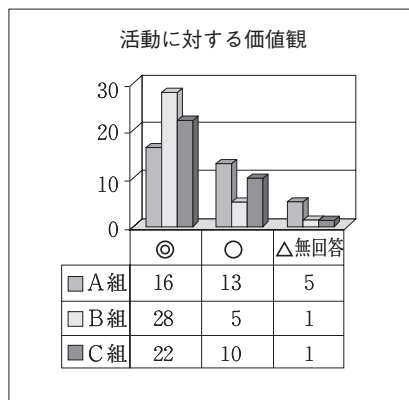
(3) 「考えを深める」話し合いの達成度

表3は今回のパネルディスカッションの価値について聞いたものである。ここから、今回の学習が有効であったと感じている生徒が多かったと言える。図2は今まで国語の力が十分であると判断されていた生徒(左図)と文章を書くことを苦手としていた生徒(右図)のパネルディスカッション直後の「振り返りシート」である。どちらも取組について客観的に自己評価ができていたことが分かると同時に、活動に対して多くの感想をもち、考えを表現していることが分かる。

「論説文」からも、学習によって生徒が「自分の考えの深まり」を感じ、喜びを感じていたことが読み取れた。

図2 振り返りシート

表3



第5次に生徒が書いた論説文からの抜粋

「パネルディスカッションを通して、メディアを時や場合によって使い分けることが必要だと思った。そうすることによって、メディアを自分の生活に役立てることができると思う。」

「緊張してモジモジしてしまう人は、電話だと相手に上手く気持ちを伝えることができないと思う。自分の伝えたいことをちゃんと吟味して、返信も間を置いて応えることができる手紙やメールが適していると思った。自分も、緊張して何を言っているか分からなくなるので、手紙やメールを上手く活用したい。」

「(手紙は)何十年たっても、その人が持っているかぎり残っている。それはとても良いことだ。」

「電話の一番の長所は、直接話ができることだと思います。なにより、その時思っていることを素直に自分の声で相手に伝える事ができる。緊張しても、その緊張感も伝えることができ、『伝えた』という達成感があると思います。」

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 成果

#### ① 「聞く」スキル学習を行い、「話す」力の基礎を定着させたこと

本研究では「聞く力」を養うスキル学習を取り入れた。生徒に付けさせたい力を意識して実践に取り組んだことは、パネルディスカッションを通して、生徒の話す力・聞く力を確実に伸ばすことに結びついた。また、それらの力の伸長が、生徒の自己評価力の向上を促すことにも繋がった。

#### ② 論題として「メディア・リテラシー」を取り上げたこと

生徒が主体的にディスカッションを行うためには、なにより生活に生きる学習活動であることを前提とする。今回はメディアの中の「メール」「電話」等のコミュニケーションツールの功罪を論題として選択した。生徒にとって生きていく上での生産性がある問題が学習課題となったことにより、学習が活性化し、生徒自身が進展を具体的に評価する観点をもつことができた。生徒は、従来のその場だけの印象的な評価を改め、相互の交流に参加し、自他の考えを耕すことに対して評価することができた。本実践の最終次(第5次)で生徒がコミュニケーションについて書いた「論説文」には「それぞれのメディアの長所、短所について深く考えられた。」「(一つのメディアを選んでしたが、電話、手紙、メールを)時と場合に応じて使い分け、生活に活かしたい」という記述が多かった。こうした姿に、生徒が話し合い活動によって考えを深め、自分自身の言語生活を幅広く評価し、さらに成長しようとする態度がうかがえる。

### (2) 課題

本研究では、学習課題を一つに絞って系統的に実践を行うことが、生徒の変容を確実に促すことを実感した。一方その指導効果を確実にするためには、次の点が課題となる。

- ① 生徒が話し合いによって自分の考えの深化や変容に喜びを感じ、その後の生活に生きる「論題」を設定すること。
- ② 学校生活の諸活動や生活が更に豊かになることを目指した「話し合い」の場を多く設定すること。
- ③ 単元の目標達成のために、教材開発や教材の組み合わせを検討すること。

議論をさける傾向のある中学生の話し合い活動において、クリティカルに聞く力を育成することは、話し合いの活性化に繋がる。生徒が自分の言語生活を見つめ、意見を交わし、考えを深め、まとめていく話し合い活動を実現させるためには、話し合いの場を多く設定し、経験を積ませることが必要であると感じている。

## 引用・参考文献

- 1) 中学校学習指導要領(平成10年12月)解説 国語編, p. 9
- 2) 同上書, p.10
- 3) 同上書, p.21
- 4) 高橋俊三『国語科話し合い指導の改革』明治図書, 2001年, p.114
- 5) 同上書, p.116
- 6) 同上書, p.116
- 7) 井上尚美・中村敦雄編『メディア・リテラシーを育てる国語の授業』明治図書, 2001年, p.13-14
- 8) 管谷明子『メディア・リテラシー』岩波新書, 2000年, p.13